

目 次

- ・ 2000年度 関東地区第1回研究例会報告
明治前期における「公文館」と「書籍館」 —歴史人類学会編『国民国家とアーカイブズ』(1999. 11) に関連して— (大沼宜規)
日本図書館協会版『図書及び図書館史』の編集を終えて (小黒浩司)
絵巻物に見る本と人の関わり (小川徹)
- ・ 第17回(2000年度)研究集会案内
- ・ ドイツ便り —ヴォルフエンビュッテル図書館・図書・メディア史研究会
研究集会— (河井弘志)
- ・ 機関誌発行予告 / 2000年度予算案
- ・ 会員動向 / 事務局から

明治前期における「公文館」と「書籍館」

—歴史人類学会編『国民国家とアーカイブズ』(1999. 11) に関連して—

大沼 宜規

(国立国会図書館)

副題に掲げた『国民国家とアーカイブズ』(日本図書センター刊)は歴史人類学会大会において1997、98年の二年間に亘って開催されたシンポジウムの記録である。このシンポジウムは国民国家論と記録史料学の接点を探る試みであり、報告者は公文館(公文書館)と書籍館について、コメントという形で論じる機会を与えられた。今回はこれをもとに、書籍館に関わるその後の調査内容を加えて、報告させていた。

本報告は国立国会図書館蔵『仏書籍館類編同公文館規則英書籍館』<請求記号01 0.2-F96ウ>を取り上げ、その紹介を通して、近年研究が進められつつある内務省の書籍館への視点の一端を検討しようとするものである。同書は内務省十三行朱罫紙に記されており、巻末には「明治九年五月廿六日校合済」と朱書され「小林」印が捺されている。文中には実際に朱による訂正もみえる。これらの事実から、内務省によって明治九年ころに作成されたものと推測される。内容は「仏書籍館類編」「公文館規則」「書籍館(英書籍館)」の三編から成る。なかでも「書籍館」は三浦太郎氏がブリタニカ8版の抄訳として紹介された内閣文庫蔵『書籍館(英国広事類韻府書籍館)』(『英国広事類韻府書籍館』および『不利智斯書籍館』について)『一九九八年度日本図書館学会春季研究集会発表要綱』に章題が一致し、しかもより

早い時期のもの様である。このようなことから『仏書籍館類編同公文館規則英書籍館』は明治初期の翻訳書である可能性が高い。そこで、同書を検討することにより、間接的にはあるが内務省の持っていた書籍館像を知ることができると考えている。

同書のうちまず、「仏書籍館類編」では書籍館を「公覧書籍館」と「官吏ソノ職ヲ行フニ欠ク可ラサルノ器具」である「官府書籍館」とに分類し、後者を重視している。そして、それが公文館的な機能を有することを示している。「公覧書籍館」に関しては「書籍館」で論じられており、また、「公文館規則」には公文館の目的、具体的な運営実態などが記されている。これらにより、明治九年時点で内務省が書籍館を「官府」と「公覧」に分けて認識していた可能性や、公文館制度の実態把握に努めていたことが知られる。当時の内務省の記録保存政策を併せ考えると、書籍館がその要素として認識されていることが推測される。そして、その前年に文部省と内務省との対立抗争の結果、書籍館が文部省下に移管されている（中林隆明「東京書籍館成立と田中不二麿」弥吉光長先生喜寿記念会編刊『図書館と出版文化』1977）ことから注目されるべきであると考えられる。

続けて、同じく明治九年刊『仏国学制』附録上（文部省）との比較を試みた。同書においては「公覧書籍館」と「官府書籍館」の区別をせず「公書籍館」としてまとめられている。また、「仏書籍館類編」が「公覧書籍館」よりも「官府書籍館」を重視した構成となっているのに対し、『仏国学制』においては「公書籍館」のなかで逆の構成をとっている。そして、公文書館を「仏書籍館類編」が「公文館」と言うのに対し、『仏国学制』が用いた「旧録館」という用語に文部省の歴史的文化的価値の重視を感じるのは穿ちすぎであろうか。

以上のように、今回は『仏書籍館類編同公文館規則英書籍館』の紹介とともに、内務省の図書館観を記録保存政策との関連でみてきたが、厳密な原本の選択や抄出の方法、用語の問題などは今後の課題としたい。

○附言

報告後「書籍館」と内閣文庫蔵『書籍館』を校合した結果、両者は本文も基本的に同一であることが判明した。ただ、前者の朱筆による訂正箇所が後者で活かされている点や、前者において「三」とある箇所（朱訂はみられない）が後者では「八」と訂正（以前に記されていたものを消して書き直した形跡がある）され、訂正を指示する付箋が貼られる点等、興味深い差違が見られる。ここから「書籍館」が『書籍館』より古い時期のものと推測される。

○参考文献

後藤純郎「官立浅草文庫の変遷」（『図書館学会年報』第40号2～3 1994）

渡辺佳子「明治期中央行政帰還における文書管理制度の成立」（安藤正人・青山英幸編著『記録史料の管理と文書館』北海道大学図書刊行会 1996）

日本図書館協会版『図書及び図書館史』の編集を終えて

小黒 浩司

(作新学院大学女子短期大学部)

本年3月、日本図書館協会より、JLA 図書館情報学テキストシリーズの第12巻として『図書及び図書館史』(B5版140p、以下本書という)を刊行した。本書の編集の経験から、司書講習科目「図書及び図書館史」で扱うべき内容について私見を述べた。

まずこの科目名が示すように、この教科では「図書館(史)」だけではなく、「図書(史)」についても取り扱う対象となる。本書では図書館資料の多様化をふまえて、「記録メディアの歴史」として、図書以外の記録メディアにも言及した。

このことに是非については、今後本会会員をはじめ多くの人たちと論議を深める必要があろう。かりに図書以外の資料などの歴史をも守備範囲とするならば、「図書及び図書館史」という科目名の変更も考えなくてはならないだろう。

次に「図書館史」の部分であるが、本書では日本の第二次世界大戦後の公共図書館史を中心に記した。また諸外国の図書館史についても、近現代の公共図書館中心の論述とした。これについても、異論があるだろう。

従来の図書館史研究は、地域別、館種別、そして特定一館史に細分化され、深化し、数多くの優れた成果を生み出してきた。しかしそれらの中には、「図書館史教育」には直接的に結びつかないものも少なくない。

時代の図書館を担う世代に伝えるべき歴史とは何か? こうした観点から図書館史研究の枠組みを見直すことも重要であると考え。本会が組織としてこの問題を検討することを提起したい。

絵巻物に見る本と人の関わり

小川 徹

(法政大学)

はじめに

中世日本、多くの絵巻が作られた。そこから当時の人びとの本(もっぱら経巻)との係わりの一端を窺ってみようとした。例会では『日本の絵巻』(中央公論社、20巻、1987-8。続27巻、1990-93)の必要な箇所をみていただきながら報告した。以下はその大略であるが、参考にした絵巻の書名と引用箇所を略記した。

・(1) ほんをつくる・

写経所における大規模な写経の事業終了後も写経は長く行われ、「法花経ノ如来寿量品ヲ書写シテ」(今昔物語巻14の4)とも見えている。絵巻ではどうであろうか。

[1] 書写する姿勢

当麻曼荼羅縁起(続第20巻-4頁[以下続20-4のように、再出のばあいは頁数のみ記す])に、横佩大臣の娘が文机にテキストとともに料紙を置いて写経する姿が見ら

れる。同様の様子は弘法大師行状絵詞上（続10-50/51）にも見える。他方石山寺縁起絵巻二（続16-16/7）には、僧侶が文机にテキストを広げ、左手に書くべき部分だけを表にして前後は巻き込んだ料紙をもち、書写している姿が描かれている。この二通りの書き方は玄奘三蔵絵（続6-19/21, 59/60）にも見られる。この絵巻は中国・インドでの三蔵法師の足跡を、画家が想像を逞しくして描いたものといわれているが、大勢の僧侶が長机に向かい合わせに坐り、經典の翻訳に励んでいるところがある。ある僧侶は料紙を机に置き、ある僧侶は左手に持って筆記している。

手紙などを書くさいにも、机に料紙を置いて書いている姿（法然上人絵伝上（続1-102）など）とともに、机に向かわず、片手に料紙をもって書く例（信貴山縁起（4-29）、松崎天神縁起（続22-4）など）が見られる。どちらも文字を書くさい自然にとる姿勢で取り立てて問題にするようなことではないのかもしれないが、手紙などを料紙を手にとって書く時、料紙の左側の染筆されていない部分は巻いて持ち、右側のすでに文字が書かれている部分は巻き込まず、そのままたれさがっている。一方写経では予め料紙を継いでかなりの長さにしてるので、料紙を手にとって書写するばあい是一行ずつ文字を書いては巻き込んだのであろうが、それはかなりの技を要したであろう。謹厳な文字で書かれている經典も料紙を手にとって書いていたのであろうか。また奈良時代写経に当たってどのような姿勢で写経師は仕事をしたのであろうか。

[2] 写経に使われたのは紙だけであったか。

稚児観音縁起（続20-68）に、向き合って二人の僧侶が書写している場面が見られるが、詞書によれば近里遠山の大衆が稚児の死を供養すべく法華經の一日經（一日で八巻本の法華經を大勢の人たちが参加して写経する。兜木正亨『法華写経の研究』大東出版、1983）を作成しているところである。『日本の絵巻』の解説は、僧侶は「テキストの法典と新たに写す經卷の料紙を、二巻ながら片手に持って、左右に目を配りながら書写していく、... 一行ごとに、左の掌の上で、巧みに行を送りながら、書き進めていく」とする。しかし絵をよく見ると、手に持っているというより、机に置いて手で抑えているように見られる上に、それは末広がりになっており、折り畳んだ料紙のようには見えない。むしろ一つ一つがばらばらの木片を手元で抑えていて、先端のほうが拡がっているように見える。また紐で束ねて机に置いてある經典の束は、角が角張っていて、紙の束というよりむしろ木片がきちんと束ねてあるように見える。これはこけら經なのではないか。同様に道成寺縁起（続24-111）のいく人かの僧侶が写経する場面についても『日本の絵巻』の解説は「折り畳んだ料紙を片手に、器用にあやつりながらせつせと筆を運ぶ」とするが、『日本仏教民俗基礎資料集成 6: 元興寺極楽坊 VI』（中央公論社、1975）ではこれをこけら經ではないか、としている。同書には同寺所蔵の数多くのこけら經が写真で紹介されており、そのなかに手元の部分が紐で結んであるこけら經やこれをかなり沢山東ねて紐で縛って立てておいてあるものがある。これらから見ると、道成寺縁起の上記の場面で、机には紙製の經卷が広げられているが、手元の部分を握って文字を書いているやや末広がりになっている束、机の片隅に束ねて置いてある手元の部分が縛ってある經典（p. 112-113にも）、これに続く場面（p. 113）で須弥壇の前に置かれた机

に見えるやはり手元の部分が縛ってある經典、また紐で縛って立てておいてある經典のやや大部の束は、いずれもこけら経と見て間違いがないように思われる。また上記解説は、この場面(p. 112)で僧侶が机の前に座って経巻を手にとって広げているところについて「みずからが書写を終えた経文を、静かに口ずさみながら、一行一行の字取りを追っていく」とする部分としている。確かに僧侶が手にしているのはこけら経ではない。従ってもし解説のいう通りであれば、書写したのはこけら経ではなくなるのであるが、絵を見るとこの僧侶が経巻を手にしてしている場面は、写経の場面から、供養の場に転じているのではないかと、思われる。この僧の目が手にしている經典にではなく、須弥壇の前の机に向けられていることもそれを物語っているようである。こけら経は読み上げるためではなく、奉納するために作成されたのではないかと。ついでに。その僧侶の前の机に置いてある三巻の経巻は手元が縛ってあり、こけら経と思われる。

ここには上記稚児観音縁起ともどもこけら経の書写風景がみえると言っている。

なお稚児観音縁起で、二人の僧侶の書写の様子なのであるが、解説ではテキストと料紙を二巻ながら片手に持って、というのであるが、画面からはどうもテキストらしきものは見えない。あるいは僧侶は法華経を誦じているのではあるまいか
[3] 書写ではないが、餓鬼草紙(7-21/2)に市場で印仏を売る女性の姿がある。横に壁に掛けられた印仏が描かれている。

・(2) 本を運ぶ・

さまざまな姿が知られる。石山寺縁起(16-54)には火事にあい、経巻を小わきに抱えたり、文机を逆さまにしてそこにいれて頭にのせたり、両手でしっかり抱えて走っている僧侶の姿が描かれている。これは非常時のばあいである。

一遍聖人絵伝(20-219)には経巻一卷を女性が手に捧げるように持っている姿が見られる。吉備大臣入唐絵巻(3-17, 52, 54)には何本かの巻物を文箱にいれているが、上に盛り上がっていて、それを紐を巻いてしばって落ちないようにして、両手で持って小走りに行く従者の姿が見られる。

一遍聖人絵伝にはまた雨宿りした一行の様子の中に、箱の蓋を開けようとする僧侶が描かれていて(p. 123)、そこに経巻がはいっていると思われる『日本の絵巻』の解説はいうが、この部分を見たかぎりでは推測を出まい。ただ貴重な経巻故に慎重に箱に入れて運ぶことが普通であったのではないかと、とは考えられる(日本霊異記に小櫃に入れた八匹の魚が法華経八巻に化けた話を載せているが(下巻第六話)、これは、經典を櫃に入れて運ぶ風習があつてのことである)。一遍聖人一行が旅する場面には笈を背負う僧侶の姿が描かれている。そのなかには経巻を入れたものもあつたであろう。しかし絵巻では、箱に入れたのでは絵にならないので、いわばむきだしで経巻が運ばれていく様子がしばしば描かれたのではなかろうか。

また、年中行事絵巻(8-21)には、僧侶が長い棒に鹿の角をとりつけ、そこに数珠とどうやら巻物らしきもの・経巻であろうか、を吊るして運んでいる姿がみられるが、一遍聖人絵伝には遊行の僧侶とともに俗人も柄に巻物を吊るしている傘を差している絵が少なくない(p. 79, 162, 191, 330)。遊行の僧侶の出で立ちであろう。が、俗人の場合、ここにどのような習俗があるのであろうか。

・(3) 本を読むー読書の場所・

古代、正倉院御物のなかに書見台「紫檀金銀絵書几残欠」が残っているが、読書する姿は明らかではない。絵巻に見える姿は多様である。

[1] 机に向かったの読書

・正座して机に巻子を広げて心静かに読む姿（春日権現験記絵上、続13-66、法然上人絵伝上、p.66）。

・やや姿勢をくずして読む姿。机に片肘をつき、片膝を立てている（融通念仏縁起、続21-6）。

[2] 机によらず読書

・座って経巻を手にとって読む姿（春日権現験記絵上、p.63）。

・楽な姿勢での読書

柱によりかかって読む姿、床に広げて読む姿（吉備大臣入唐絵巻、p.48-9）。子どもがふたり、寝ころんで本を広げている姿（春日権現験記絵下、続14-33）。

[3] 源氏物語絵巻（1-37）には有名な、姫がお付きのものに読ませている図がある。読み手は冊子本を手を持ち、姫は薄縁に絵冊子を広げて聞き入りつつ絵を見ている。

[4] 子どもが学んでいる姿

信貴山縁起（p.29）には長者の家で僧侶が巻子を手にする姫の横で文字を教えるような様子が描かれている。西行物語絵巻（19-31）にもある。

[5] 読書の場所。読経は別として静かな一室（春日権現験記絵上、p.66ほか）での読書、付書院での読書の例（法然上人絵伝上、p.22, 29, 159ほか）が見られる。

・(4) 本をしまう。あるいは本が置いてあるところ・

これまでしまう、と言うと経蔵・文倉のことを中心に語られてきたように思われる。しかし戦乱の中世、それだけではない。さまざまであった。例えば山科言継は大切な文書、書物を箱にしまって、転々とひとを頼って保管を依頼していたと日記（言継卿記）に書いている。心配で時々見に出掛けていた様子もうかがわれる。絵巻物ではどうか。春日権現験記絵に、白河上皇が康和年中(1099-1104)、一切経論を書写させて社頭に経蔵を建てて収めた、と見えている（巻二、詞書の最初の部分 p.8-9）が、絵からは、卷子本を机の上に置いたり、二階棚（三階棚）に並べて置いてあるばかり、櫃に入れられているばかりが知られる。

[1] 机の上に置いている様子はよく見られる。なかには文机の横の机の上に卷子本が縛って置かれている（石山寺縁起絵 p.77）例もある。

[2] 二階棚（石山寺縁起絵 p.62）、あるいは三階棚（松崎天神縁起 p.4、長谷雄草紙(11-28)）に卷子本が置かれている。冊子本もみえる（融通念仏縁起 p.6）。

これらは所蔵量がさほど多くない場合であろう。

[3] 多くなれば箱にいれる。箱にいれるばかり、箱にラベルが貼ってある例も（法然上人絵伝 p.32）見られるが（古くからそうしていたことは造東大寺司でも同様にラベルを貼っていたことから窺える（正倉院文書））、そして法然上人絵伝のこの部分の詞書にもみられるように、書庫（経蔵）に保管したのである。

なお、『平安遺文』金石篇に治承2年(1178)の年記をもつ「名古屋市七ツ寺一切経辛櫃蓋銘」(473)がある。蓋の裏に朱漆でこの櫃に収める經典が貴重なので、将

来にわたって守るべきこととして五か条が書かれている。その大要は・だれもない時ひとりで辛櫃を開けるな、・たとえ知り合いであっても他国他境の者に貸し出すな、・僧侶は誰かに頼まれて秘かに借り出すな、・年に一度炎天下虫干しすること、・書写・奉読のためであっても一度に一合ずつ貸し出すこと、借りたものを返したら一合貸すこと、一度に「多合」貸すことはならない、というものであった。貴重な經典の扱いの一端を知ることができよう。

・おわりに・

以上、会報用に整理するに当たり若干補記しましたが、未解決の部分少なくなく、不十分なままであること、ご海容いただければ幸いです。

日本図書館文化史研究会 第17回(2000年度)研究集会 (ご案内)

日時：2000年9月9日(土)13時－10日(日)16時

場所：明治大学リバティータワー (1115号教室) (神田・駿河台)

参加費 (会場費)：会員500円、非会員1,000円

懇親会 会場：リバティータワー23階「紫紅」 参加費：5,000円

申込先 小黒浩司

申込締切 2000年8月31日 (木)

研究集会のテーマ：図書館づくりの思想と実践―その歴史的検討― (第2日)

および個人自由発表

実行委員会：阪田蓉子 (代表)、小黒浩司 (運営委員)、石井敬三 (事務局長)

小川徹、宇治郷 毅、奥泉和久、山口源治郎、中林隆明

研究集会プログラム

第1日 (9月9日・土) 司会・進行：小川・宇治郷

13:00 受付 (小黒浩司)

13:20 実行委員会「開会の辞」阪田蓉子代表

13:30 自由発表1 山本順一 (図書館情報大学)

無料公開図書館の魁、ピーターボロー図書館をめぐって (仮題)

14:15 発表2 深井耀子 (相山女学院大学短期大学部)

トロント市立図書館の児童サービス―第一次大戦を背景に―

リリアン・スミス児童部長による年次報告 (1912-1951) の記録から

15:00 休憩

15:15 発表3 大和博幸 (国学院大学)

江戸時代における広域出版物流通の形成と展開

16:00 休憩 (会場準備)

16:15 日本図書館文化史研究会「総会」

17:00-19:00 懇親会 (明治大学リバティータワー23階「紫紅」)

第2日 (9月12日・日) 司会・進行：小黒・中林

09：00 発表4 細井岳登（立教大学院）

幕末期における文庫の設立—伊勢国射和文庫を事例として—

09：45 発表5 泉山靖人（東北大学大学教育開放センター）

公共図書館の教育機能について—昭和戦前期を中心にして—（仮題）

10：30 発表6 宋道勉（鳥取女子短期大学）

イタリア語文献に表われた図書館—図書館人類学試論—

11：15 チャットコーナー

11：45 昼食

12：45 問題提起（テーマ）・発表1

山口源治郎（東京学芸大学）：図書館づくりの思想と実践—その歴史的検討—

13：30 テーマ発表2 川島恭子：東村山市立図書館と住民運動（実例報告）

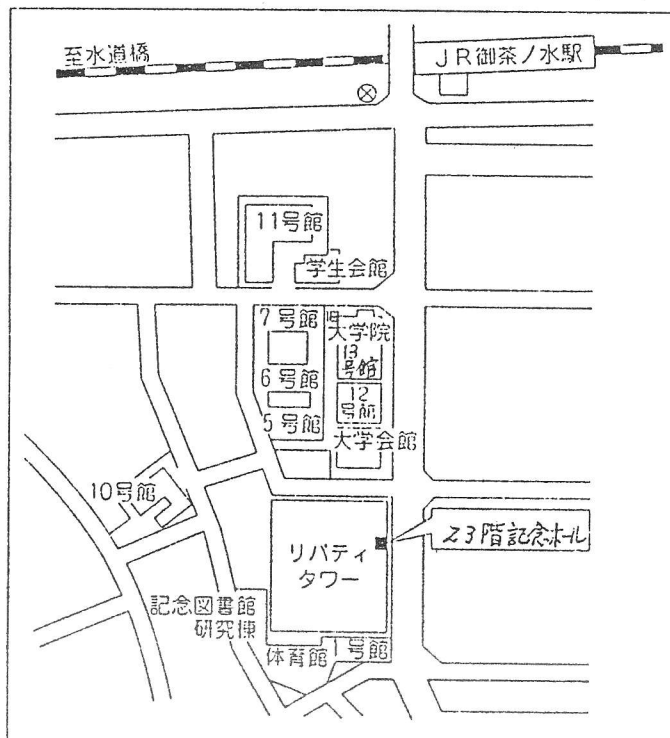
14：15 テーマ発表3 奥泉和久（横浜女子短期大学）：図書館づくり運動前史—図書館史研究の視点から—

15：00 休憩

15：15 論議・総括

16：00 閉会（阪田代表）

明治大学駿河台校舎案内図



5月15-17日の3日間、ヴォルフエンビュッテルの Herzog August Bibliothek において、恒例のヴォルフエンビュッテル図書館・図書・メディア史研究会の研究集会が開催された。

この研究会の足取りをみると、1975年に図書史研究会(Arbeitskreis fuer Geschichte des Buchwesens)が結成され、1979年に図書館部門が分離独立して図書館史研究会(Arbeitskreis fuer Bibliotheksgeschichte)となり、1998年にふたたび両研究会が統合されて、図書館・図書・メディア史研究会(Arbeitskreis fuer Bibliotheks-, Buch- und Mediengeschichte)となったという、やや複雑な経過をたどっている。日本の図書館史研究会が図書館文化史研究会に発展した経過とくらべると、興味ぶかい。運営委員は6名、年次集会年を隔年、図書館史ゼミナールを毎年開催している。集会のたびに特定のテーマをかかげ、発表原稿はのちに冊子体で刊行されてきた。会長は1985年以来ずっと Stuttgart Hochschule fuer Bibliotheks- und Informationswesen の学長 Dr. Peter Vodosek 氏がつとめており、今年の集会は同氏とフランクフルト/M の Dr. Joachim-Felix Leonhard 氏によって企画、進行された。

今年度は、図書館が歴史上、文書館、博物館、劇場などの各種文化施設とともに果たしてきた役割を見直し、協力関係(Kooperation)と競争関係(Konkurrenz)の両面から考察しようとすることをテーマとした。研究会自体が図書館、図書、メディアを包括する広い領域を対象とする方向へ進展しており、その意図が今年度のテーマに反映されたものであろう。

最初の発表者はシュトゥットガルトの文教部長 Dr. Iris Jana Magdowski で、ハイドンが領主の保護によって大音楽家になり、モーツアルトが領主との関係悪化によって痛ましい最期をとげた例をあげながら、18世紀の文化は領主によって支えられていたという点に注目し、同じ例としてヴォルフエンビュッテル図書館、ハイデルベルクのパラティナ図書館をあげた。18世紀には個人の収集活動が展開、19世紀には上層市民が市民文化を支え、クルップのような企業主も文化後援に参加し、20世紀には国家や自治体が文化後援の役割を担うことになった。市民大学、図書館、音楽学校などが公的文化活動にとりこまれた。公立化(Kommunalisierung)は文化の民主化(Demokratisierung)であり、Kultur fuer alle が文化政策の基本となった。1970-80年代に図書館、市民大学、市民会館、文化センターが激増し、公共図書館の地域館の数によって教育政策の成功度が評価されたが、それはニーズにもとづくものではなく、「みんなのための文化」は「だれのためにもならぬ文化」となった。90年代以降、文化政策のパラダイムが変化し、「みんなのための文化」ではなく、「市民参加の文化」をスローガンとして市民が文化の後援に協力しはじめた。それは文化参加による自己実現でもある。公共図書館サービスのマーケティング、民営化、ボ

ランティア制導入、パート職員による運営、資料の寄贈の促進などが今後の課題となる。こうして Magdowski 氏は図書館の独自性を文化活動一般のなかに融合しながら、あわせて民営化の方向をうかがうのである。

続くベルリン市立図書館長 Dr. Claudia Lux 氏は、行政のなかで他の文化教育施設と予算を争わねばならない立場にあるので、図書館の民営化の道をとらず、諸文化施設との競争と協力のなかで、公共事業としての図書館サービスの維持を目指す。図書館は博物館と重複するような図書以外の資料をも収集提供しながら、文化創造の活動 (kulturschaffende Leistungen) において主導的役割をはたすべきである、図書館は「市の文化センター」 (Kulturzentrum der Stadt) とならねばならない、との強い主張で発表は終わった。ドイツを代表する大都市の部長と図書館長という二人の女性リーダーの迫力ある論争で、研究会の緊張が盛り上がった。

ベルリンの Humboldt 大学博物館の Joachim Bruening 氏は、Humboldt 大学の各種博物館の発展史を個別にくわしく解説し、戦争の被害が60%に達したと報告した。やや記述的な発表であったため、出席者から、コレクションと教育の関係、物と図書の関係についての見解がもとめられ、また British Museum が物と図書を分割して、図書館が独立したことについて指摘も行われた。

ボーフムの Germanisches Nationalmuseum の Wolfgang Ernst 氏は、中世修道院では博物館、文書館、図書館が統合されて、そこに multimedial な状況が存在したが、18世紀になって博物館が図書館から分離した、コンピュータ時代にはテキストと目録がひとつのデータベースに入った、図書館もこれからはメディア館 (Medeothek) となり、図書と AV メディアとの分裂状態も克服されるだろう、と述べた。インターネットの役割を強調したのが注目された。

ヴァイマルの Anna Aamalia Bibliothek 館長 Dr. Michael Knoche は同館の歴史をふりかえり、1720年ころに学術図書館となったが、まだ分類も目録も整備されてはいなかった、18世紀になって博物館の一部となって芸術館 (Kunstkammer) となり、この統合がコレクションの質に影響を及ぼした、という。図書館は博物館と同じく見学の対象となったが、利用のための図書館ではなかった、領主図書館は総合性を持っていたが、多くの部屋に区画され、利用に不便で非難を受けた、1758年に文書館、博物館から図書館が分離、現在みるような図書館となったが、図書館はあいかわらず見学の対象で、新しい図書館観は生まれなかった、ともいう。この発表をとおして、Knoche 氏は、華麗な図書館建築が必ずしも近代の機能主義の図書館の理念と整合性をもつことがないことを指摘した。華麗な Weimar 図書館の長が、美しい図書館の機能性の欠如を指摘し、図書館と博物館の間の違いを強調したのは印象的であった。

Marbach のシラー資料館の Ulrich Ott 氏は「作家の遺産」と題して、文学資料の収集保存について発表した。1888年の文学研究集会につづいて、1889年に Marbach にシラー文書館が設立され、1892年にはゲーテの資料も受入れされた。文書館を国費で経営すべきか、民間資金で経営すべきかについて議論があり、結局、協会

(Verein)が結成された。現在ではシュヴァーベン文学の資料も収集している。性格からして Weimar の Anna Amalia Bibliothek と競争する関係にある。文学資料館は特定テーマに限定して閉鎖的になることがあるが、なるべく他の関係の資料も受け入れ保存するべきである。受け入れられないときは他の大学図書館、文書館を紹介している。この発表は文学資料館と図書館の関係を論ずるもので、ヴァイマルの Knoche 氏などが強い関心をしめした。

コペンハーゲンの JØrgen Svane-Mikkelsen 氏は国立図書館の司書で、同図書館の歴史を紹介した。同館は大学図書館として設立され、17世紀まで唯一の大学図書館であった。15世紀には義務納本制度が成立して、自動的に大学図書館へ図書が納入されるようになり、これが絶対主義政治体制を支えた。1696に大火災が発生、大学図書館が炎上してデンマークの貴重資料が多数失われた。その後王立図書館のほうに力を増した。1793年に王立図書館が国立図書館となり、19世紀中葉には自然科学分野が大学図書館にゆだねられた。1930年代には、人文・社会科学は国立図書館、自然科学は大学図書館という収集分担体制が確立された。

Dr. Franz Georg Kaltwasser(代読)報告では、諸侯の芸術館と図書館が未分化の状態にあった時代がテーマとなった。図書は内容と形をあわせて完全体をなす。中世には図書は他の物品と同様、祭祀的な目的で見るとして展示された。バイエルンの Albrecht 5世は、1558年にイエズス会士の蔵書を購入して宮廷図書館(Hofbibliothek)を設立し、Fugger 家の蔵書を購入するなどにより、みるまに大図書館となった。ハイデルベルクの領主 Ottheinrich もミュンヘンと競争して図書を収集した。このころ図書館は芸術館と不可分の一体をなして、世界の全体像を提示しようとするイタリア・ルネッサンスの理念に導かれていた。天体儀と地球儀を図書館のなかに置くのもその思想のあらわれである。Samuel von Quichelberg の博物館論は、分類体系によって自然の秩序をあらわそうとした。図書と物は分離されず、ある種の図書は図書館でなく芸術館に展示された。ミュンヘンの宮廷図書館のモデルはミケランジェロが設計したフィレンツェのラウレンチアナ図書館である。蔵書展示室の典型はスペインのエスコリアル図書館、ミラノのアンブロジアナ図書館である。やがて宮廷図書館はショールームから宴会場(Bankette)かわった。Albrecht 5世は芸術館と図書館をアーケードで結んで、芸術館が図書館からきりはなされた。芸術館によって全世界の秩序を示すという意図も失われ、個々の展示物の芸術的出来栄のみが珍重された。美しいマヌスクリプトは図書館でなく芸術館に展示された。図書館と芸術館の統合していた時代を描くことによって、Kaltwasser は図書館と博物館がもともと不可分の統合体であったことを示し、Kooperation-Konkurrenz というふたつの原理に直面した現代の図書館の将来の方向をさぐるための資料に供したのであろう。

Rottenburg 司教区図書館の Georg Ott-Stelzner 氏は同図書館の概要を紹介した。同館はスペースが狭くなったので1996年に改築された。これと同時に4つの図書館が統合され、教会図書館ではなくなった。資料からすると博物館的な図書館(museale

Bibliothek)である。1919年には蔵書6000冊程度の図書館であったが、1920年代に司教区図書館の総合目録の原稿が作成され、図書館としての体制を確立した。

以上の発表を聞いていろいろ考えさせられるところがあった。まずドイツでも図書館史が単独では存続しがたい時代にいたっている、という点。図書館と各種文化施設との関係、および図書とメディア類との関係を総合的にみななければならないという、現代の切実な問題がみえてくる。とくにニューメディアやインターネットにどう対応すべきかを、歴史研究の側面から考えてみようとするとりくみは、意欲的である。図書館史研究者だけでなく、行政の長、博物館員、文学資料館員などを加えての研究集会は、日本の図書館文化史研究会ではまだ行ったことがないのではなかろうか。ただ、博物館・文書館・図書館の交点や、問題意識がかならずしも明瞭でなく、広域共同研究の一層の展開を待たねばならない。図書館建築自体が美術作品といえるようなものが多いヨーロッパでは、図書館が博物館化した例が少なくないが、これにたいして現代図書館サービスの理念から、反発ないし警戒心が示されたのは興味深かった。

なお、Leonhard 氏は東京 IFLA で大学図書館の蔵書構成にかんする発表を行い、GMD 東京事務所長 Dr. Ulrich Wattenberg 氏宅での日独図書館員の懇談会にも参加した人である。また Lux 氏は、8年前にベルリンの Senatsbibliothek を見学したときの館長で、私のことを覚えていてくれた。同年に Anna Amalia Bibliothek を見学したときには、Knoche 氏にもお会いした。いずれも懐かしい再会であった。

☆機関誌発行予告（内容紹介）

『図書館文化史研究』17号は9月25日発行予定で、現在既に校正が終了し印刷工程に入っています。

内容は以下の通りです。ご期待ください。

- ・ 図書館法制定過程における CIE 図書館担当官の関与について
三浦 太郎
- ・ 射和文庫研究序説
一幕末維新期文庫研究の視座― 細井 岳登
- ・ 天津日本図書館
―ある植民地図書館の歴史― 米井 勝一郎
- ・ 図書館フェミニズムと図書館女性史
―アクティヴィズムと学術研究、および公正と文化―
スザンヌ・ヒルデンプランド
田口 瑛子 訳

日本図書館文化史研究会2000年度予算案

[一般会計]

収入の部

会費	405,000.	2000年度分 (3,000×135人)
雑費	200.	
前年度繰越金	188,857.	
総計	594,057.	

支出の部

事務局費	75,000.	
会議費	10,000.	
消耗品費	15,000.	
通信費	25,000.	
交通費	25,000.	
ニューズレター	145,000.	
編集発行費	85,000.	年4回 (名簿刊行を含む)
送料	60,000.	
機関誌刊行費	250,000.	『図書館文化史研究』No. 17
編集費	50,000.	入力作業等を含む
発行費用	170,000.	買い取り費用・委託送料を含む
抜刷費用	30,000.	
研究会運営費	36,000.	
研究集会・総会	15,000.	第16回研究集会関係費
研究例会	11,000.	関東及び関西で年3回+α
運営委員会	10,000.	年4回程度
積立金 (特別会計)	50,000.	
予備費	38,057.	
総計	594,057.	

[特別会計：20周年記念事業積立金 (1982-2002)]

1996-1999年度	600,000.
2000年度	50,000.
総計	650,000.

～原稿募集～

- ◇『図書館文化史研究』18号(2001年9月刊行予定)の原稿を募集します。
原稿の締切は2001年3月31日です。投稿を予定される方は事務局まで
ご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。
- ◇「ニューズレター」の原稿を募集しています。

研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、
MS-DOS標準テキストの原稿を)事務局(石井)あてお送りください。

会員動向(住所変更 / 勤務先変更)

事務局から

神奈川県三浦市にお住まいだった安達将孝氏宛のニューズレターが転居先不明で
戻って来ています。安達氏の情報をご存じの方は、恐れ入りますが事務局までご一
報ください。また、郵便物の宛名シールに記載されている住所に誤りがありま
す場合は、お手数ですが、事務局までご一報ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三